

〈研究ノート〉

# ラーニング・ストーリーを用いた子育て支援 (記録・評価・カンファレンス)

—ニュージーランドの実践報告を通じて—

佐藤 純子

(2019年1月17日受理)

## 要 旨

本稿は、ニュージーランドの保育所や幼稚園などの幼児教育施設を訪問し、記録や評価、保育計画のあり方について報告するものである。訪問した視察先ではどこの施設においてもラーニング・ストーリーを用いての保育記録を行っていた。

改定後の保育所保育指針においては、乳児、1歳以上3歳未満児への保育についてのねらい及び内容が示されたとともに、保育者と家庭（保護者）との連携が強調されている。日本において、未満児の保育がますます一般化されていくなかで、保育者が担う役割として、保護者との関わりや子育て支援の重要性が増している。本報告では、ニュージーランドで実践されている記録・評価・カンファレンスの実際を紹介するとともに家庭との連携についても言及していく。

キーワード ラーニング・ストーリー、観察記録、保育評価、家庭との連携

## 1. はじめに

2015年4月から「子ども・子育て支援新制度」が始動し、就学前のすべての子どもたちを対象とした保育・幼児教育・子育て支援の実践が目指されることとなった。ニュージーランドにおける幼保一元化は、1986年に敢行され、1996年には、統一カリキュラムである「テ・ファリキ」を完成させている。2017年には、「テ・ファリキ」の改定もなされ、4月12日に教育大臣より交付された。新たな「テ・ファリキ」では、学びの成果を小学校カリキュラムへどのように接続していくかが詳細に追記されるようになり、旧カリキュラムで示されてきた全人的な評価観から小学校への準備といった教育成果への明示化として進められることとなった<sup>1)</sup>。とはいえ、「テ・ファリキ」における子ども観としては、子どもを「有能な学び手」として捉えており、子ども一人ひとりの固有性に配慮した保育や教育が提供されるべきものであるとしている<sup>2)</sup>。「テ・ファリキ」の理念には、乳幼児が社会に貢献するための知識と所属感を持ち、心身ともに健康で、有能かつ自己肯定感を保持する学習者として育成されることが示されている。

1

ニュージーランド政府は、認可園への補助金を交付する条件として、「テ・ファリキ」を用いるとともに、学びのアセスメント（評価）の実施を義務付けている。ニュージーランドにおけるアセスメントの方法としては、国立ワイカト大学（University of Waikato）のマーガレット・カー（Margaret Carr）教授らが開発したラーニング・ストーリーを用いることが多い。

ラーニング・ストーリーは、子どもの学びをアセスメントする評価方法となるが、子どもの学びの成果をチェックリストで評価するのではなく、保育者や家庭が子どもの「学びへ向かう構え（Learning Disposition）」に着目し、その姿をナラティブな方法で評価していく方法である<sup>3)</sup>。つまり、子ども一人ひとりの興味や関心、意欲や心情などを肯定的に見るためのひとつの指標ともいえる。Carr（2001）は、「できないこと」を「できるようにする」という視点を持つのではなく、子ども自身の学びの構えを大切にすべきだと述べている。具体的な学びの構えは5つあり、子どもの活動を「興味関心を持って取り組んでいること」、「夢中になって取り組んでいること」、「挑戦して取り組んでいること」、「自分の心情を表現していくこと」、「他者への貢献や責任をとっている姿が見られること」の視点から捉えていく<sup>4)</sup>。

ラーニング・ストーリーで示されている子ども観は、「社会文化的な子ども観」と呼ばれている。すなわち、子どもたちは、自分自身の家族、それらをとりまく地域や社会資源、人的資源との相互作用によって醸成される経験や生活、遊び、文化を通じて育成、発達していくという考え方がベースとなっており、保育者と子どもの家族（保護者）が「有能な学び手である子ども」の視点に立って、子どもを理解していくという手法であると捉えることができる<sup>5)</sup>。

日本においては、2017年、改訂幼稚園教育要領、改定保育所保育指針、改訂幼保連携型認定こども園教育・保育要領が告知された。これを機に、保育の質の向上の視座から評価のあり方が改めて問い直されている。さらに、評価をしていく上で、家庭の役割はもちろんのこと、保育・教育機関と家庭との連携が重要であることが明示されている。そこで、2018年9月2日から7日にかけて視察したニュージーランドの保育・幼児教育・子育て支援現場の実践、特にラーニング・ストーリーを用いての記録・評価・カンファレンスのあり方について、家庭との連携の方法も踏まえて報告していく。

## 2. ニュージーランドの保育・幼児教育の実践

### (1) 視察・訪問先

2 2018年9月2日から9月7日に、ニュージーランドの北島のハミルトン市とオークランド市の2都市を訪問した。ハミルトン市では、国立ワイカト大学教育学部（Waikato University）、大学内保育所（Waikato University, Campus Creche Trust）、幼稚園（Leaming Kindergarten Waikato）、先住民マオリ保育所（Kohanga Reo in Te Kura Amorangi o Whakawatea）、親が運営する幼児教育施設プレイセンター（Tamahere Playcentre）の5施設を視察した。オークランド市では、小学校（Whangapararua Primary School）、幼稚園（Roskill South Kindergarten）

の2施設を視察した。本稿では、保育者による記録や評価、カンファレンスの持ち方や保育者と家庭の連携についてラーニング・ストーリーの取り組み実践から学ぶという目的から、訪問した7施設のうち、Teacher-Led Centre（有資格保育者主導型）の施設として区分されている大学内保育所1園と幼稚園2園の計3施設を事例として報告することとした。

## (2) Waikato University, Campus Creche Trust (2018年9月4日訪問)

キャンパス・クレッシュは、1973年にワイカト大学の敷地内に設立した。現在は、NPO法人立となっており、16人の保育者が働いている。大学の教員や学生だけでなく、地域枠もあり近隣地域の家庭も利用している。4つの年齢別施設（園舎・園庭）が独立して設置されている。4つのセンターは、①Whiki Room（概ね3ヶ月～1歳3ヶ月未満）②Kowhai Room（概ね1歳3ヶ月以上～2歳6ヶ月未満）③Maire Room（概ね2歳6ヶ月～3歳9ヶ月未満）④Kauri Room（概ね3歳9ヶ月以上～5歳児）に分かれている。保育時間は、7:30～17:30となっている。保育の特色としては、動植物を育てたり、大きな園庭で自然体験（Nature Based Program）ができるような環境を提供している。また社会的スキルを育成するために、保育者が方法を示しながら、子どもたち自身が問題を解決できるような保育が目指されている。



年齢別に保育施設（環境）を区切っているため、各施設間で定期的に異年齢の子どもと交流する時間を設けている。保育者は、2週間に1回全体での保育カンファレンスを実施しており、ラーニング・ストーリーなどの保育記録を報告し、各クラスの子どもの発達状況や興味関心の所在についての共有を行っている。そのため、年齢が上がり、次の建物に移っても子どもたちはすぐに新しい担任保育士や施設に慣れ、接続が円滑にできているのだという。各家庭には、All About me Sheet（私に関する情報シート）を記入してもらっている。そこには、名前、名前の由来、誕生日、出生地、家族構成、ペット、家庭で話す言語、家庭で大



資料1 各家庭への連絡コーナー



資料2 掲示してあるラーニング・ストーリー

切にしている行事、子どもの情報で園に知っておいてほしいこと、特徴ある癖や行動、保育所で培ってほしいと考える子どもの力の項目があり、保護者や養育者が自由に記載していく形となっている。保育者は、家庭とそのシートをもとに対話をしながら、子どもの興味関心に合わせて遊びを提供し、子どもの観察と記録をしているという。記録物は、個人のポートフォリオに綴じられ、家庭は適宜コメントや家庭での様子を記録していく。

上記のほか、家庭へのお手紙コーナーには、個々の写真とともに、①What I am working on ... (現在、夢中になって取り組んでいる遊び) ②Specific Activities (特別な活動) ③Links to my whanau and the wider community (家族や地域と連携して取り組んでいる内容) が掲示されており、保護者はお迎えのときにその掲示物を確認して保育理解を深めている。

### (3) Leaming Kindergarten Waikato (2018年9月5日訪問)

リーミングトン幼稚園は、ワイカト幼稚園協会に所属する幼稚園である。月曜日から金曜日まで8時～15時半まで開園している。通常の幼稚園は、小学校が休みの期間は休園しているが、この幼稚園は学校が休みの期間も開園している(費用は別料金)。Parents Support (手伝いの親)も保育に入っている。定員は、40名で4人の教諭と1名の事務員が勤務しており、子ども10人に対して1名の教員比率で運営している。特に担任(Key Teacher)は決めておらず、教員間で話し合いながら保育を行っている。そのため、保育記録であるラーニング・ストーリーも全ての教諭が全ての子どもを対象に適宜つけ、個別計画(Individual Plan)を立てている。特に書き手を決めていないのは、どうしても記録物は保育者の主観が入ってしまうので、特定の保育者が特定の子どもの記録を書くのではなく、さまざまな保育者がさまざまな視点に立って複眼的に子どもを見合えばよいと考えているからだという。とはいえ、記録の数が偏ってしまった場合には、不公平にならないよう意識して記録の少ない子どもの記録を書く場合もあるとのことであった。ラーニング・ストーリーの共有は毎日の反省会で行っており、保育計画に関わるカンファレンスは週に1回行っている。ラーニング・ストーリーは、各保育者に週4～5時間確保されているノン・コンタクトタイム(子どもたちと関わらず、書類だけに集中できる時間)に書いている。保育の評価方法としてラーニング・ストーリーを用いた一番の効果は、写真によって保育活動が可視化されていることや子どもの出来ないことよ



資料3 個別ポートフォリオ



りも出来たことに着目していることから、保護者が好意的にラーニング・ストーリーを受け入れるように変わっていったことだという。その結果、導入前と比較して、家庭と会話する機会が増えたようだ。保育記録は、園内にポートフォリオを置いておくだけでなく、各家庭がStory Parkという登録サイトからオンラインで見られることもできるようになっている。主任のロレイン教諭は、こうした家庭との連携を通して、ひとつの記録物を作り上げていく過程(いろいろな人が記録を見たり、書き足したりする形態)をMelting Pot(素材のるつぼ)と表現していた。

保護者は、登録サイトから子どもの保育記録を読んだり、コメントを載せたりしている。さらに、家庭で作ったラーニング・ストーリーをポートフォリオに付け加えたりしながら、保育者と家庭との双方向のやり取りが実現している。園からは、記録や評価を読み、なにかよい遊びの提案や意見があれば、職員会議や保育カンファレンスに参加することができ、保育チームと一緒に話し合う機会がいつでも開かれていることを各家庭に対して伝えている。

#### (4) Roskill South Kindergarten (2018年9月6日訪問)

ロスキル・サウス幼稚園は、オークランド市内に1972年に設立された幼稚園である。オークランド幼稚園協会の傘下組織となっている。2003年に改革事業推進園(研究センター)6園のひとつに選ばれ、3年間に渡るアクション・リサーチ・プロジェクトに参画した。このプロジェクトでは、「ICTを通じて持続可能な地域共同体を創造するには、どのような教授法が求められるのか」について取り組んだ。大学の研究者(ワイカト大学のマーガレット・カー教授やウエンディ・リー教授ら)がプロジェクトに加わり、調査研究が進められた結果、ロスキル・サウス幼稚園は国内外の幼児教育・保育を牽引する幼稚園へと成長した。実際、政府による保育・教育の評価機関であるERO(Education Review Office)からもVery Excellent(極めて優秀)の評価を受けている。



ロスキル・サウス幼稚園に勤務する職員は、6名となっている。内訳は、4名の幼稚園教諭、1名の無資格のパート保育者、1名の補助教員となっている。補助教員は、1週間10時間勤務し、掃除・教材の補充と準備などを担当している。この補助教員を雇うことになった理由は、2000年にラーニング・ストーリーの記録を開始した際、補助教員がいたらもっと保育者が記録に集中できる時間が確保できるのではないかと考えたからだという。ラーニング・ストーリーによる評価方法を導入して間もない頃は、チェックボックスで出来たことを評価するやり方に慣れていない保育者は混乱し、反発があったようだ。しかし、記録を重ねていくうちに、上から教育責任で学ばせるのではなく、子どもから湧き出る学びの芽を捉えて、伸ばしていく「子ども主体性」の大切さに気づけるようになっていったという。保育者



資料4 グループポートフォリオ



資料5 保育者による記録・評価の説明

と家庭との連携に関しては、質の高い記録を書くことによって家庭と保育者間の信頼関係を構築することが容易になったという。保護者は、「わが子がこんなこともできるのか」と保育者に伝えるように変わっていったようだ。つまり、ラーニング・ストーリーは、自園の保育のあり方や考え方 (Philosophy of what we are) を伝えるツールとなっている。要約すると、ラーニング・ストーリーは、子どもにとって遊びがいかに大切かを家庭に伝える媒体となっているということになる。

保育者に対して、ラーニング・ストーリーを記録することによって得られた効果について聞いてみると、「保育者としてワクワクすることが増え、保育が楽しくなった。」「保育者がいかに子どもに対して影響力を持ち、子どもがどのように変わってくるかがはっきりと見えるようになった。」と語っていた。また、ラーニング・ストーリーは経験の積み重ねで豊かになっていくものなので、保育者養成校の授業のなかでももっと取り上げて教えて欲しいとの要望も語られた。

カンファレンスは、毎日行っており、保育チームでラーニング・ストーリーを基に振り返りを行っている。このカンファレンスでは、4人の教諭全員が集まり、保育計画を相談している。家庭との共有は、個人のポートフォリオを自宅に持ち帰ってもらったり、Story Park という登録サイトからe-Portfolio (通信ポートフォリオ) を見てもらおうようにしている。

### 3. まとめにかえて

本報告では、筆者が2018年9月にニュージーランドに赴き、視察訪問で学んできたラーニング・ストーリーについての内容を示してきた。ラーニング・ストーリーは、個々の子どもの学びをNarrative (物語的) に記述し、評価していく記録方法である。今回訪問した小学校以外の全ての施設がラーニング・ストーリーによる記録・評価を行っていた。そして、どの園でも子どもたちが自分のポートフォリオを家庭にいつでも持ち帰って良いことになっており、いくつかの園ではICTを用いた記録・評価を家庭に対して公開していた。こうした機会を設けるのは、子ども自身がポートフォリオを媒体にして家族や友人と成長・発達を喜び合うことができるからである。また、家族からのコメントや子どものことを一番良く知る

保護者ならではの遊びの提案が得られるという意図も込められていることも分かった。実際、多くの訪問園で、ラーニング・ストーリーを書くようになってから、家庭との会話が増え、コミュニケーションが円滑になったと語られていた。さらに、多くの園では家庭からのラーニング・ストーリーを書いて園に持ってくることを保護者に推奨していた。以上のことから、ニュージーランドでは、「保育者と家庭の子育てのパートナーシップ」がうまく構築されているという印象を受けた。さらに、子ども自身にとっても文字を読んだり、家族や保育者と語ったりするきっかけとなり、乳幼児の言葉の発達にもよい影響を及ぼすと認識されていることがわかった。

今回の訪問で明らかとなったことのもうひとつは、ニュージーランドの幼児教育カリキュラムである「テ・ファリキ」が2017年に改訂され、「テ・ファリキ」を象徴してきた全人的で包括的な子ども観が弱まり、学びの成果が強調される揺り戻し現象が起きてきているという事実である。しかしながら、ラーニング・ストーリーが大切にしている評価方法は、子どもの能力をチェックボックスに記していく結果主義的な評価方法ではない。むしろ、その子の持つ興味関心や能力に寄り添った子ども中心型の評価方法となっている。ラーニング・ストーリーを記録する際には、既述のとおり、子どもが①何かに興味をもったとき、②集中・熱中して取り組んでいるとき、③難しいことや不確かなことにチャレンジしているとき、④自分の考えやアイデアを表現しようとしているとき、⑤他者がいる中で、何かに責任を持って取り組んでいるときに、その子の中に「学びの構え」ができたときと捉えていく。そして、保育者は、こうしたサインを見逃すことなく、ラーニング・ストーリーの記録を綴っていく。ラーニング・ストーリーは、写真などを用い保育・教育を可視化することによって子ども自身や他の保育者、家庭とともに個々の発達や興味関心の所在、保育内容の共有を図っている。つまり、ラーニング・ストーリーは、保育を伝えるコミュニケーションのツールであり、そのことがラーニング・ストーリーの大きな特徴ともなっている。

ニュージーランドの教育省が発行している、20冊に渡る学びのためのアセスメントブック (Kei Tu ate Poe, Assessment for Learning) では、「家族が一番子どものことを知っている」と記され、保育者と家庭との連携の大切さを強調している。そこではまた、保護者がラーニング・ストーリーを読むことを通じて、保護者自身が家庭の持つ子どもに関する情報や知識を保育者に提供したい、遊びのアイデアを保育場面に生かしてみたいと思うようになっていくのだと述べられている<sup>6)</sup>。

保育者は、家庭に対して一方向のコミュニケーションを取りがちである。しかし、子どもに対し、次にどのような保育計画を立てていくかを考えていく評価の形成過程において子どもの保護者（家庭）が保持する力は大きく、彼らは助言や提案を与えてくれる重要な存在なのである。

新たな保育カリキュラムの中の「子育て支援」の科目では、家庭との連携とそれを支えるための保育記録・評価・カンファレンスの重要性がより一層強化されている。このような動向からも、本報告で示してきた子ども主体の記録方法や家庭と園の双方向で評価をしていくラーニング・ストーリーは、保護者が家庭とは異なる園環境の中での子どもの姿を把握し、

わが子の発達や成長を理解する上でも重要となることを再確認することができた。

本稿は、ニュージーランドのハミルトン市およびオークランド市の2都市にある特定の保育所と幼稚園の一事例の報告にすぎない。しかし、ラーニング・ストーリーを用いた保育評価はニュージーランドでは一般化されているため、今回の視察先で学んだ実践例は、日本の保育や幼児教育に参考となる点が多く、意味のあるものであった。今後は、日本の保育所や幼稚園、プレイセンターをはじめとする子育て支援の活動現場でラーニング・ストーリーを紹介し、蓄積された記録集（ポートフォリオ）についての研究に従事していくことができればと考えている。

追記：本報告に掲載している写真は、研究に使用する目的のみで論文に使用・掲載することの許可を得ている。

#### 注

- 1) 飯野祐樹「ニュージーランド幼児教育政策における『質保障』『質評価』の展開過程に関する研究—テ・ファアリキと歩んだ20年に焦点を当てて—」『保育学研究』日本保育学会、第56号、2018年、pp.56-67.
- 2) 佐藤純子「普段使いのテ・ファアリキ：子どものありのままをみるツール」『現代と保育』Vol.69, ひとなる書房, 2007, pp.38-53.
- 3) 大宮勇雄『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010.
- 4) Carr, M. *Assessment in Early Child Settings Learning Stories*. SAGE, London, 2001.
- 5) 中坪文典編『子ども理解のメソドロジー』ナカニシヤ出版, 2012.
- 6) Ministry of Education. *Inclusive Assessment: Te kahui Aromatawai*. Kei Tu ate Poe, Assessment for Learning. Wellington, 2000.